

平成 2 9 年度愛知県外来種調査結果の概要

1. 条例公表種等に関する情報収集

県内に生息生育する外来種（国外移入種及び国内移入種）のうち、陸域における外来種を対象とし、県内の生態系に著しく影響を及ぼすおそれのある移入種（外来種）として「自然環境の保全及び緑化の推進に関する条例」に基づき愛知県が公表する種、特定外来生物及び特に悪影響の懸念される外来種の中から以下の12種を選定し、主として既存資料調査（文献調査、標本調査）及びヒアリング調査により、生息生育情報等を収集・整理した。

① ヨシススキ（イネ科）	【新規作成】
② ニワウルシ（ニガキ科）	【新規作成】
③ ツルニチニチソウ（キョウチクトウ科）	【新規作成】
④ ヒメイワダレソウ（クマツヅラ科）	【新規作成】
⑤ メリケントキンソウ（キク科）	【加筆修正】
⑥ ハツカネズミ（齧歯目 ネズミ科）	【新規作成】
⑦ ガビチョウ（スズメ目 チメドリ科）	【加筆修正】
⑧ ソウシチョウ（スズメ目 チメドリ科）	【加筆修正】
⑨ ムネアカハラビロカマキリ（カマキリ目 カマキリ科）	【新規作成】
⑩ クビアカツヤカミキリ（コウチュウ目 カミキリ科）	【新規作成】
⑪ フェモラータオオモモフトハムシ（コウチュウ目 ハムシ科）	【新規作成】
⑫ オオクビキレガイ（柄眼目 オカチョウジガイ科）	【新規作成】

これらの調査結果について種ごとに整理を行い、「ブルーデータブックあいち 2012」に準じた1種あたり1頁（A4版）程度の概要を記載した文書を作成した。なお、「ブルーデータブックあいち 2012」にて既に文書が掲載されている種については、最新の情報に基づき文章を加筆修正し、該当箇所を赤字で示した。掲載されていない種については、新たに文書を作成した。

【新規作成】

種子植物 <被子植物 単子葉類 イネ科>
SPERMATOPHYTA <POACEAE>

重点対策

ヨシススキ *Saccharum arundinaceum* Retz.

【概要と選定理由】

大型の多年生草本。最近侵入してきた帰化植物の中では最も自然への影響が危惧される植物の一つで、自動車専用道の法面緑化材に紛れ込んできたものと考えられる。2m を越える草丈になり、桿と葉が密生して立ち上がるので、周辺の他の植物の生育は著しく阻害される。法面から周囲の林縁・林床へと広がっていく危険がある。

【形態】

稈は直径 2~3cm。密に束生し、高さ 200~250cm になる。葉は線形、幅 2~4cm、桿の下部から出て長さ 1m、基部は葉鞘となって桿を抱く。葉舌は白毛になる。桿の先にサトウキビに似た 40cm を越える長い総状花序をつける。種子は風散布する。

【分布の概要】

【世界の分布】

原産地はインド~東南アジア。現地では 4m を越えることがある。

【国内の分布】

群馬県、神奈川県、三重県、大阪府、愛媛県、香川県、徳島県、島根県、宮崎県、種子島、沖縄。

【県内の分布】

東：8 新城市（旧鳳来町）名号（瀧崎 30745, 2014-11）。西：24 豊田市松平志賀町（芹沢 93611, 2017-10）。尾：37a 瀬戸市吉野町（芹沢 85202, 2009-10）。新東名高速道や三遠南信道沿いには多量に生育しているが、採集できない。

【生育地の環境／生態的特性】

工事跡の法面に群生する。小花には長い毛があるため、自動車の走行による風によって道路沿いに散布される可能性が高い。ただし現在のところは、新東名高速道の外では豊田市東海環状道松平 IC 付近に群落が見られるだけである。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩	○	○		
湿地				
水域				

【侵入の経緯／現在の生育状況】

当初は、飼料として栽培されていたものが逸出したと言われる。近年急激に分布を広げたのは、法面緑化材として中国から持ち込まれた種子に混入していたものが由来と考えられる。三遠南信道では、竣工して間もない頃から生育が認められた。

【被害状況／駆除策と留意点】

道路の法面だけでなく、それにつながる林縁、さらには明るい林床にも侵入し始めている。丈の高い桿が密生するので、在来種を含む他の草本はその生育を著しく阻害される。すでに侵入から年数が経過した場所では、ほぼ純群落になっている。大きな植物で、桿が硬く、手による除草は困難である。早急な対策が求められる。今後分布が拡大する可能性があるため、特に高速道路等の法面でのモニタリングが必要である。高速道路法面以外の場所で確認された場合は、株数が少ないうちに駆除する必要がある。

【関連文献】

農教Ⅱ p.462.

(瀧崎吉伸・芹沢俊介)

【新規作成】

種子植物 <被子植物 真正双子葉類 ニガキ科>
SPERMATOPHYTA <SIMAROUACEAE>

重点対策

ニワウルシ *Ailanthus altissima* (Mill.) Swingle

【概要と選定理由】

種子が風散布する落葉高木。成長が早い。芽生えは路面間隙雑草のような性質を持ち、アスファルトの裂け目に生育し、路面を傷つけることがある。また、裸地に先駆的に侵入するので、攪乱の多い河川敷にも侵入する。シンジュとも呼ばれる。

【形態】

落葉高木。幹は直立し、高さ 10~25m に達する。樹皮は灰白色で縦に浅い割れ目ができる。若枝は赤味を帯びた緑色で、長さ 40~60cm に達する奇数羽状複葉を互生する。小葉は 6~10 対で、長卵形~披針形、先端は鋭尖頭になる。初夏に長さ 30cm ほどの円錐花序をつけ、緑白色の小さな 5 弁花を多数つける。果実はねじれた翼状で、淡紅色に熟し、中央に平たい種子があり、風散布される。

【分布の概要】

【世界の分布】

原産地は中国北~中部。ヨーロッパ、南北アメリカ、オーストラリアに帰化している。

【国内の分布】

もともとは庭木として植栽されたものだが、逸出して本州各地で広がっている。

【県内の分布】

東：12 新城市（瀧崎 24828, 2008-10T）、15 豊橋市北部（瀧崎 16486, 1997-7T）、17 田原市姫島（瀧崎 25693, 2009-7T）。西：19 豊田市旧旭町域（日比野修 1493, 1993-7）、20 豊田市旧足助町域（塚本威彦 1937, 1993-7）、23 豊田市旧藤岡町域（塚本威彦 1520, 1995-6）、24 豊田市北東部（山崎玲子 1993-5）、25 豊田市北西部（山崎玲子 283, 1992-9）、26 豊田市南部（中村さとこ 573, 1993-7）、28 岡崎市旧額田町域（原田勉 605, 1997-5）、29 岡崎市旧市域北部（中西普佐子 840, 1993-6）、32a 刈谷市（中村裕治 640, 1994-6）、33 安城市（堀田喜久 1615, 1992-6）。尾：37a 瀬戸市（日比野修 1339, 1993-6）、38b 日進市（村瀬美智子 891, 1993-10）、39b 豊明市（渡辺幸子 1652, 1994-6）、41a 東海市（吉鶴靖則 844, 2016-5）、41b 知多市（村松 28291, 2016-7）、46a 扶桑町（上山秀郎 393, 1995-5）、49c 北名古屋市（鈴木幸子 454, 1993-5）、50 名古屋市北部（鳥居ちる子 911, 1995-6）、51 名古屋市南東部（渡辺幸子 997, 1993-6）、52 名古屋市南西部（高木順夫 19619, 2010-10T）、53 一宮市東部（佐分康之 555, 1996-6）、54 一宮市西部（渡辺幸子 1842, 1994-8）、55 稲沢市（水野峰子 346, 1994-8）、58a 蟹江町（永田晴美 573, 1994-5）。

【生育地の環境／生態的特性】

裸地に先駆的に侵入するほか、路面間隙的な生育も見せる。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩		○	○	
湿地				
水域				

【侵入の経緯／現在の生育状況】

国内の分布で述べたように、もともとは庭木として植栽されたものである。各地に生育しており、道路の法面などのほか、一部の場所では河川敷など自然度の高い場所にも侵入している。

【被害状況／駆除策と留意点】

矢作川ではヤナギ類の生える河畔林に侵入し、樹林の上に樹幹を広げている。今後の動向に注意が必要である。

【関連文献】

農教Ⅱ p.142.

(瀧崎吉伸・芹沢俊介)

【新規作成】種子植物 <被子植物 真正双子葉類 キョウチクトウ科>
SPERMATOPHYTA <APOCYNACEAE>

重点対策

ツルニチニチソウ *Vinca major* L.**【概要と選定理由】**

ヨーロッパ原産のつる植物で、直径4cmほどの5弁に分かれる大きな青い花を咲かせる。花が美しく、もともとは園芸目的で持ち込まれたものであるが、各地で遺棄されたり逸出したりしている。逸出したものは林内に入り込み、旺盛につるを伸ばして接地した節から発根し、栄養的に繁殖して林床を一面に覆い、他の植物の生育を著しく阻害する。

【形態】

多年生草本。つるは長く地面を這って、節から発根する。葉は対生、短い葉柄があり、葉身は卵形、先端は尖り、革質で光沢がある。花は対生する葉の片方の葉腋につき、花弁は直径約4cm、5裂して青く、中心部は白く抜ける。栽培品は葉に白斑が入るものがあるが、野生化したものは斑のないものが多い。

【分布の概要】**【世界の分布】**

原産地はヨーロッパ。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【県内の分布】

東：12 新城市富岡（瀧崎 31811, 2016-5T）、13 豊川市旧音羽町域（瀧崎 19362, 2002-2T）、15 豊橋市北部（瀧崎 s.n., 1977-3T）、16 豊橋市南部（瀧崎 27485, 2011-5T）、18 田原市旧渥美町域（瀧崎 26609, 2010-4T）。西：20 豊田市旧足助町域（鈴木万里亜 491, 1995-5）、21 豊田市旧下山村域（芹沢 91177, 2016-6）、25 豊田市旧市域北西部（土場トシ子 419, 1994-4）、26 豊田市旧市域南部（石川敏 255, 1993-5）、27 みよし市（臼井里華 172, 1992-4）、29 岡崎市旧市域北部（中西普佐子 283, 1993-3）、31 幸田町（金子律子 378, 1995-5）、33 安城市（堀田喜久 3284, 1994-5）、36 西尾市佐久島（瀧崎 28267, 2012-4T）。尾：37b 日進市（伊藤恭子 63, 1992-4）、41a 東海市（岡島錦也 411, 1993-4）、42a 阿久比町（渡邊麻子 37, 1995-3）、42b 半田市（岡本久美子 61, 2000-4）、43 常滑市（梅田零奈 100, 2000-4）、44b 南知多町（瀧崎 25121, 2009-4T）、45 犬山市（佐分康之 321, 1996-5）、49c 北名古屋市旧春日町（鈴木幸子 620, 1994-4）、50 名古屋市北部（鳥居ちゑ子 3047, 2012-4T）、51 名古屋市南東部（中島ひろみ 519, 1996-4）、52 名古屋市南西部（鈴木秀樹 1850, 1996-4）、53 一宮市東部（栗田郁男 238, 1993-6）、54 一宮市西部（瀧崎 27492, 2011-5T）、55 稲沢市（家田晴俊 307, 1995-5）。

【生育地の環境／生態的特性】

つるがよく伸び、カバープランツとして利用される。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林		○	○	○
草・岩		○	○	
湿地				
水域				

【侵入の経緯／現在の生育状況】

不要になり投棄されたと思われるものが、群落を形成する。暖地の林縁・林床に多いが、豊田市旧足助町域、旧下山村域など、やや寒冷な場所にも生育する。明るい林床だけでなく、造林地など、やや暗い場所にも見られる。

【被害状況／駆除策と留意点】

大部分の帰化植物は攪乱地に生育するだけであるが、本種は自然度の高い林の中にも侵入するため、特に注意が必要である。豊橋市南部の表浜海岸では、海岸林の林床を埋め尽くして他の植物の生育を著しく阻害している。

【関連文献】

農教 I p.227.

(瀧崎吉伸・芹沢俊介)

【新規作成】種子植物 <被子植物 真正双子葉類 クマツヅラ科>
SPERMATOPHYTA <VERBENACEAE>

重点対策

ヒメイワダレソウ *Phyla canescens* (Kunth) Greene**【概要と選定理由】**

地面を這うつる植物。節から発根して栄養的に繁殖し、地面をびっしりと被う。もともとは水田畔の防草緑化材や、住宅周りのカバープランツとして導入されたものであるが、水田畔では高い草刈り圧を加え続けると他の雑草に被陰されて十分に密生群落を作れない。周囲に逸出したつるが、明るい林縁や芝地などに侵入する。芝地に侵入すると、芝を覆って繁茂する。冬期は葉が枯れる。

【形態】

多年生草本。つるは直径1.5~3mmで、節間20~30mm、数節ごとに分岐する。若枝では節間が短くなり、節から15~25mmの短い側枝を分ける。若枝の節と側枝の節に多くの葉がつき、グリーンカーペット状になる。葉は各節に対生し、1~2mmの葉柄があり、葉身は長倒卵形、長さ8~13mm、幅4~6mm、先端は尖り、革質で厚く、辺縁には先の尖る鋸歯がある。托葉は狭長倒卵形、長さ5~7mm、幅1~2mmである。花期は初夏~秋で長く、若枝の節から長さ30~50mmの花茎を立ち上げ、先端に長さ6~10mmの穂状花序をつける。花は密に輪生し、唇形で、長さ約3mm、白色~淡桃色、中央は黄色になる。

【分布の概要】**【世界の分布】**

原産地は南アメリカ。世界各地に帰化している。

【国内の分布】

全国各地に生育している。

【県内の分布】

東：12 新城市富岡（瀧崎 31815, 2016-5T）、13 豊川市赤坂町（瀧崎 30727, 2014-10T）、16 豊橋市南部（瀧崎 30361, 2014-6T）。西：30 岡崎市舞木町（瀧崎 27126, 2010-10T）。尾：40a 大府市（竹田弘光 135, 1993-6）、41a 東海市（吉鶴靖則 681, 2015-7）、43 常滑市（鳥居ちゑ子 2740, 2009-8）、44a 美浜町（高木順夫 16500, 2008-7）、50 名古屋市北区（岩堀正浩 8・8, 1992-8）、51 名古屋市天白区（渡辺幸子 4275, 2000-6）、52 名古屋市港区（高木順夫 18068, 2009-8）、55 稲沢市（渡辺幸子 6282, 2011-7T）、56a あま市七宝町（芹沢 92873, 2017-8）。

【生育地の環境／生態的特性】

明るい湿り気のある場所を好む。ちぎれた茎の節からも発根するので、挿し芽でも増やすことができる。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩		○	○	
湿地				
水域				

【侵入の経緯／現在の生育状況】

カバープランツとして庭園に園芸目的で導入されたり、水田の畔に防草効果を期待して導入されたりした。もともとは植栽されたものだがすぐに逸出して、裸地状の場所では旺盛に生育している。ただし他の植物に覆われる場所では生育が抑制されるので、自然植生への影響は限定的と思われる。

【被害状況／駆除策と留意点】

ちぎれた茎からも発根するので、駆除の際には注意が必要である。

(瀧崎吉伸・芹沢俊介)

【加筆修正】

種子植物 <被子植物 真正双子葉類 キク科>
SPERMATOPHYTA <ASTERACEAE>

メリケントキンソウ *Soliva sessilis* Ruiz et Pav.

【概要と選定理由】

最近侵入してきた帰化植物の中で、人体への直接的影響が危惧される植物の一つ。初夏～夏に鋭い棘のある果実を作り、その棘が靴の裏側や車のタイヤなどに刺さって運ばれる。公園や河川敷の芝地に入り込むことが多く、その上にレジャーシートなどを敷いて座ると、びっくりするほど痛い。

【形態】

1年生草本。茎は分枝して広がり、直径5～20cmの株になる。葉は枝の先端部につき、長さ5～15mmの柄があり、葉身は楕円形、長さ8～20mm、幅7～15mm、2回羽状（大きい葉では一部3回羽状）に切れ込む。花期は4～6月、頭花は枝の先端につくが、葉腋から出た枝が伸長して先端に再び頭花をつけるため枝の途中につくように見え、果時に直径7～10mm、そう果は扁平で左右に翼、先端に棘があり、長さ約4mmである。

【分布の概要】

【世界の分布】

原産地は北アメリカ。南アメリカ、アジア、オーストラリアに帰化している。

【国内の分布】

本州。

【県内の分布】

東：13 豊川市（中西普佐子 3646, 2016-5）、15 豊橋市北部（中西普佐子 3649, 2016-5）、16 豊橋市南部（中西普佐子 3223, 2009-5）、18 田原市旧渥美町域（瀧崎 31550, 2016-4）。尾：48 春日井市高蔵寺町（芹沢 86959, 2011-5）、50 名古屋市西区（芹沢 91125, 2016-5）、同名東区（鳥井ちゑ子 3057, 2012-6）、51 名古屋市昭和区（鳥井ちゑ子 2908, 2011-6、同（渡辺幸子 6813, 2014-5）、55 稲沢市（渡辺幸子 6415, 2012-5）。41b 知多市新舞子などにもあるという。

【生育地の環境／生態的特性】

公園の芝生など、やや湿り気のある日当たりのよい場所に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩			○	
湿地				
水域				

【侵入の経緯／現在の生育状況】

日本では1930年に和歌山県で採集されたのが最初の記録であるが、全国的に増加したのは比較的近年のことである。愛知県では2009年に豊橋市小島町で採集され、2011年になって春日井市の庄内川河川敷と名古屋市でも確認された。この時点で、豊橋市や名古屋市は侵入初期と判断されたが、春日井市ではすでに相当の個体数が生育していた。現在では県内の平野部に広く生育している可能性があるが、小型で目立たない植物であるため、分布状況は十分把握されていない。

【被害状況／駆除策と留意点】

知多半島の新舞子海岸では、海水浴場の足洗い場の芝生に侵入し、利用ができなくなっているという。伊良湖岬では、灯台近くの芝生広場や休暇村のさららパークに広がり、利用者に注意を呼びかけている。

【関連文献】

保帰化 p.34, 平帰化 p.221, 農教Ⅱ p.287.

(瀧崎吉伸・芹沢俊介)

【新規作成】

脊椎動物・哺乳類 <齧歯目（ネズミ）目 ネズミ科>
VERTEBRATA MAMMALIA <RODENTIA MURIDAE>

重点対策, 世 100

ハツカネズミ *Mus musculus* Linnaeus, 1758 subsp. (*castaneus*, *domesticus*, *musculus*)

【概要と選定理由】

住居性の小型齧歯類でありヒトとの関わりが深い。世界の侵略的外来種ワースト 100 に指定されており、在来の個体群のほかにも名古屋港コンテナ置き場で外来個体群（亜種）が定着している。

【形態】

成体の体重は9～23g、頭胴長57～91mm、尾長42～80mm (Iwasa 2015)。毛は短く柔らかく、赤みを帯びず、背面は茶色、腹面は白く毛の基部のみ淡いスレート色 (国立環境研究所 2018)。

【分布の概要】

【世界の分布】

種としてのハツカネズミ (*Mus musculus*) は、ユーラシア・アフリカ・オセアニア全域に分布するが自然分布域は判然としない (国立環境研究所 2018)。

【国内の分布】

種としてのハツカネズミ (*M. musculus*) は、国内の主要な島と周辺の島々に生息する (Iwasa 2015)。1998年から2001年にかけて厚生労働省研究班による遺伝子分析の結果、名古屋港と神戸港を含む全国7港で外来種（亜種）のハツカネズミが発見されている (中日新聞 2003)。

【県内の分布】

種としてのハツカネズミ (*M. musculus*) は、県内のヒトの居住域の屋内および耕作地周辺の草地など。これらとは別に、外来亜種としてのハツカネズミ (外来ハツカネズミ個体群) が「名古屋港のコンテナ置き場」で発見されている (中日新聞 2003)。「名古屋港のコンテナ置き場」には、名古屋市港区の「船見埠頭」、飛島村の「飛島埠頭」、弥富市の「鍋田埠頭」があるものの、どのコンテナ置き場で捕獲された個体であるのかは判然としない。

【生息地の環境／生態的特性】

家屋、水田、畑、積み藁、土手、草地、河川敷、荒地、砂丘地等に生息する (国立環境研究所 2018)。原野では穴居生活をおこない、種子、野草、花、園芸野菜、米、昆虫等を食べる (国立環境研究所 2018)。野外では春と秋の明瞭な繁殖期を持つが、人間世界に依存している集団では、生息場所によって若干の違いはあるが年中繁殖活動をおこない、産仔数は平均5.6で秋にやや高い (国立環境研究所 2018)。

【侵入の経緯／現在の生息状況】

近年名古屋港と神戸港で確認された外来亜種のハツカネズミはコンテナに紛れ込んで侵入し、これらは東南アジアや欧州に由来すると考えられている (中日新聞 2003)。これらを除く「在来」のハツカネズミも「外来種」とされて日本列島のほぼ全域に生息するが、その侵入年代は「不明」とされている (国立環境研究所 2018)。Nunome ほか (2015) によれば、国内の在来ハツカネズミは中国北方・朝鮮半島経由の *musculus* 亜種、中国南方・台湾経由の *castaneus* 亜種と *domesticus* 亜種の混合したものと考えられている。

【被害状況／駆除策と留意点】

畑地周辺の在来個体群は農作物に被害を与え、屋内の個体は保存食物等を汚染することがある。名古屋港等の外来個体群からは LCMV (リンパ球性脈絡髄膜炎ウイルス) が検出されており、髄膜炎や脳炎をヒトに感染させる可能性が危惧されている (中日新聞 2003, 高木・大沢 2012)。港湾地区の外来個体群は根絶を目指した捕獲や殺処分による対策が望ましい。

【特記事項】

近年、スペイン産モリアカネズミ (*Apodemus sylvaticus*) から未知の LCMV 株が分離されており (高木・大沢 2012)、外来ハツカネズミ個体群からヒトや住居性あるいは野生ネズミ類への感染の広がりも考慮する必要がある。大学や研究所で飼育されている実験動物のマウスや猛禽類の餌やペットのマウス (いずれもハツカネズミと同種) が逃亡して野生個体との交雑をおこして遺伝子の汚染が起こらないよう対処すべきである。

【引用文献】

中日新聞. 2003. 国内にない感染症 港の外来ネズミに病原体 厚労省調査 名古屋港などに上陸. 中日新聞 2003年7月12日 夕刊 p.12.

Iwasa, M. A. 2015. *Mus musculus* Linnaeus, 1758. The wild mammals of Japan (2nd ed), p. 185. Shokadoh, Kyoto.

国立環境学研究所. 2018 (閲覧). ハツカネズミ. 国立環境学研究所侵入生物データベース

(<http://www.nies.go.jp/biodiversity/invasive/DB/detail/10130.html>) .

Nunome, M. et al. 2015. Mosaic genome structure of multiple subspecies in the Japanese wild mouse *Mus musculus*

molossinus. The wild mammals of Japan (2nd ed), p.185. Shokadoh, Kyoto.

高木利一・大沢一貴. 2012. リンパ球性脈絡髄膜炎ウイルス. 実験動物ニュース 61(1): 2-4.

(子安和弘)

【加筆修正】

脊椎動物・鳥類 <スズメ目 チメドリ科>
VERTEBRATA AVES <PASSERIFORMES TIMALIIDAE>

特定, 重点対策, 日 100

ガビチョウ *Garrulax canorus* (Linnaeus, 1758)

【概要と選定理由】

東南アジア北部に生息するツグミ大の小鳥。近年特に関東を中心に急激な分布の拡大がみられ、拡大した分布域では生息環境の優占種となっている。愛知県はこの関東中心分布群の西端にあるが、今後さらに分布が拡大して生息数が増大することが危惧される。国の特定外来生物であり、日本の侵略的外来種ワースト 100 にも選定されている。

【形態】

全長 20~25cm。体は明るい茶色で頭から胸にかけて黒褐色の細かい縦斑があり、嘴は黄色。目の周りを囲んで後ろに伸びる白い帯状模様が特徴的で、名前の由来となっている。

【分布の概要】

【世界の分布】

原産地は中国南部、海南島、台湾、香港、ベトナム北部、ラオス北部。日本以外ではハワイで野生化している。

【国内の分布】

日本海側を除く宮城県から愛知県までと島根県、山口県、九州の北部と中部など。積雪の多い地方には侵入していない。

【県内の分布】

2007年11月に豊根村旧富山村で確認されて以降岡崎市、豊田市、設楽町でそれぞれ複数回の確認記録がある。2017年までは同一地点で継続して観察されている場所が無いことから、県内においては繁殖が定着していないものと推測されるが、岡崎市では場所は異なるものの2016年以降3例の観察記録(筆者私信)があり、県内の生息数は増加しているものと思われる。

【生息地の環境／生態的特性】

里山や人家に近い低山、丘陵地の雑木林、河川敷などに生息して藪を好む。あまり高くは飛ばず、地上を走り回って昆虫や種子、果実などを食べる。繁殖期は4~7月で低木や藪に営巣し、非繁殖期は小群で生活する。

【侵入の経緯／現在の生息状況】

江戸時代より移入されており戦後の飼い鳥ブームに多く輸入されたといわれるが、当時の国内ではそれほど飼養の流行はなく、野生化もみられなかった。野外で最初に確認されたのは北九州で1980年代、山梨県では1990年代からであり、その後現在まで継続して分布を拡大している。

【被害状況／駆除策と留意点】

国内で農業などへの被害は報告されていないが、ハワイでは生息環境の優占種となって在来種衰退の一因となっていることから、国内でもクロツグミ *Turdus cardis* をはじめとするツグミ類など地上採餌性の在来種との餌をめぐる競合が考えられる。囀りは騒がしい大声で確認は比較的容易と思われるので、県内で繁殖分布が拡大する前に駆除することが望まれる。

【特記事項】

中国では囀りを楽しむ鳥として一般的に飼養されており、鳴き合わせ会などもおこなわれている。海外への移入は華僑によるものが多いとされ、ソウシチョウ *Leiothrix lutea* とともに日本やハワイに持ち込まれたものが逸出して野生化している。国内への移入はソウシチョウとともに江戸時代からはじまっており、多量に輸入されたのは戦後の飼い鳥ブームの頃であったにもかかわらず、国内各地で本格的な分布の拡大が始まったのはそれよりかなり後の1980年代からである。

国内における分布拡大の要因として、飼養対象としての需要が低下したことにより飼養者や販売業者が遺棄したという説もあるが、生息環境である低山帯や丘陵地の林に人の手が入らなくなってジャングル化していることや、地球温暖化がすすんで国内の気象が原産地のそれに近くなっていることなども考えられる。

【引用文献等】

愛知県 HP. 2017. 愛知県環境部 鳥類調査結果 <http://www.pref.aichi.jp/kankyo/sizen-ka/shizen/yasei/chouturi/index.html>

【関連文献】

多紀保彦(監), 2009, 日本の外来生物, 475pp, 平凡社, 東京.
池田清彦(監), 2009, 外来生物事典, 463pp, 東京書籍, 東京.

(高橋伸夫)

【加筆修正】

脊椎動物・鳥類 <スズメ目 チメドリ科>
VERTEBRATA AVES <PASSERIFORMES TIMALIIDAE>

特定, 重点対策, 日 100

ソウシチョウ *Leiothrix lutea* (Scopoli, 1786)

【概要と選定理由】

中国南東部からインドを経てヒマラヤ西部に分布する小鳥。近年急激に分布を拡げ、県内では希少な環境である標高 1000m 程度の原生林や二次林で多数が繁殖しており、ここでの最優占種となっているが、この希少な環境を繁殖場所としている在来種への影響が憂慮される。国の特定外来生物であり、日本の侵略的外来種ワースト 100 にも選定されている。

【形態】

全長 12~15.5cm。背面が暗緑色で頭頂部はオリーブ色、目の周囲から頬にかけて淡黄色。喉は黄色で胸は橙色。翼に黄色と濃い赤色の斑。成鳥の嘴は赤で幼鳥は黒、雌は雄より体色が淡色である。

【分布の概要】

【世界の分布】

中国南部、ベトナム北部からミャンマー北部、インドアッサム地方、ヒマラヤ西部。原産地では標高 1000~3000m 程度の場所で繁殖する。日本以外ではスペイン、フランス、ハワイへなどへ移入されて分布している。ハワイにおける分布は、華僑が飼育していたものの放鳥が原因であるとされている。

【国内の分布】

千葉県を除く関東甲信越、東海、近畿、中国、四国、九州と山形県、福井県。

【県内の分布】

繁殖期に設楽町、豊根村、新城市、豊田市、岡崎市で確認されており、越冬期は設楽町、新城市、蒲郡市、豊橋市、豊田市、岡崎市、安城市、西尾市、瀬戸市、豊明市、名古屋市中で確認されている。

【生息地の環境／生態的特性】

県内では主に標高 1000m 程度の原生林や二次林のササ群落で繁殖するが、近年は低山帯や丘陵地の林でも繁殖期の生息が確認されている。越冬期は主に低山帯や丘陵地の林、平野部の河畔林などで観察されている。繁殖期は4月から10月頃までと長く、産卵から巣立ちまでは1ヶ月程度と短いので1年に複数回繁殖しているものと思われる。食性は昆虫、果実、種子などである。

【侵入の経緯／現在の生息状況】

江戸時代より移入されていたが、華僑が祝い事で放鳥したものが1931年に兵庫県の再度山に定着したのが最初とされる。兵庫県の個体群は1945年以降に消失したといわれており、戦後の飼い鳥ブームには多数が輸入されたといわれるが、その当時に野生化した例は報告されていない。国内で再度野生化が認められたのは1980年代からであり、愛知県では2000年頃から野生での生息が確認されるようになった。繁殖期は山地、越冬期は主に山麓の丘陵地や平野部の河畔林などに生息する。

【被害状況／駆除策と留意点】

繁殖地が愛知県の絶滅危惧種であるコマドリ *Erithacus akahige akahige* やコルリ *Erithacus cyane*、アカハラ *Turdus chrysolaus*、マミジロ *Zoothera sibirica* などのツグミ類と重なっており、近年これらの生息数が激減していることから競合による影響も考えられる。コマドリの減少は写真撮影者や密猟者による影響が大きいので、ソウシチョウによる影響の程度を知ることは難しい。ソウシチョウの駆除策としては、繁殖期直前に繁殖地での捕獲が効果的と思われる。

【特記事項】

国内における分布の拡大についてみると、ガビチョウ *Garrulax canorus* と同じく1960年代には多数輸入されており逸出もしていた。飼養対象としての需要が低下したことにより飼養者や販売業者が遺棄したことが分布拡大の要因であるという説があるが、気候の温暖化が進み国内の気候条件が原産地のそれに近くなっていることも分布拡大の要因と推測される。

県内では、本来の繁殖地と思われる環境で最初に生息が確認されたのが2000年8月15日段戸裏谷(緒方)である。現在も主な繁殖地は同様の標高であるが、その後低山帯へも繁殖分布が拡大し、2017年5月6日には丘陵地である豊田市自然観察の森でも巣とヒナが確認(大熊私信)された。

【引用文献等】

愛知県 HP. 2017. 愛知県環境部 鳥類調査結果 <http://www.pref.aichi.jp/kankyo/sizen-ka/shizen/yasei/chouturi/index.html>

【関連文献】

多紀保彦(監), 2009, 日本の外来生物, 475pp, 平凡社, 東京.
池田清彦(監), 2009, 外来生物事典, 463pp, 東京書籍, 東京.

(高橋伸夫)

【新規作成】

節足動物・昆虫類 <カマキリ目 カマキリ科>
ARTHROPODA INSECTA <MANTODEA MANTIDAE>

ムネアカハラビロカマキリ *Hierodula venosa* (Olivier, 1792)

【概要と選定理由】

県内の記録は2012年以降であり、それ以前の侵入は確認されていない。在来種ハラビロカマキリより体が大きく、分布地域ではムネアカハラビロカマキリがハラビロカマキリよりも多く見られるなど、分布の拡大が著しい。

【形態】

体長は♂は58~66mm、♀では59~80mm。

前脚基節上部には、やや淡い黄土色の小さな突起が8~9個ならぶ事で、在来種ハラビロカマキリと区別できる。

【分布の概要】

【世界の分布】

マレーシア、インドネシア、インド、ミャンマー、フィリピン。

【国内の分布】

愛知県(吉鶴2014)、岐阜県(山崎ほか2012)、福井県(藤野ほか2010)、山梨県(間野ほか2014)、神奈川県(川島ほか2016)、東京都(間野ほか2014)、岡山県、京都府。

【県内の分布】

名古屋市、春日井市、瀬戸市、豊田市。



(雄) (雌)
ムネアカハラビロカマキリ (戸田撮影)

【生息地の環境/生態的特性】

公園などの林縁や草地で見られる。これは他の在来ハラビロカマキリやオオカマキリなどと同様であり、また生息地では本種からもハリガネムシ(種類未同定)の寄生がよく見られる。

【侵入の経緯/現在の生息状況】

竹材を輸入する時に、元の国で産卵され卵鞘がついたものがそのまま日本に持ち込まれたと推測されている。

【被害状況/駆除策と留意点】

侵入地では、在来のハラビロカマキリの捕獲数が減り、ムネアカハラビロカマキリが増えている。また、今まで見られなかった地域からも発見の報が増えており、拡大は続いていると考えられる。現在のところ、捕獲以外の駆除方法は無い。

【引用文献】

- 藤野勇馬・岩崎拓・市川顕彦, 2010. 福井県敦賀市でハラビロカマキリ属不明種の成虫と卵囊を採集. 昆虫と自然 43 (5): 32-34.
- 山崎和久・Schutte Kai・名和哲夫・土田浩治, 2012. ムネアカハラビロカマキリ(仮称)の日本からの発見と分布に関する報告. 日本昆虫学会第72回大会講演要旨.
- 吉鶴靖則, 2014. 愛知県矢作川中流域における外来性ハラビロカマキリ属の一種の分布状況. 豊橋市自然史博物館研究報告, (24): 1-5. 豊橋市自然史博物館.
- 間野隆裕・宇野総一, 2014. 豊田市におけるハラビロカマキリとムネアカハラビロカマキリの分布動態と形態について, 矢作川研究 No.18: 41-48. 豊田市矢作川研究所.
- 間野隆裕・宇野総一, 2015. 矢作川流域におけるムネアカハラビロカマキリの分布拡大. 矢作川研究 19: 107-112.
- 川島逸郎・渡辺恭平, 2016. 神奈川県川崎市で確認された外来種ムネアカハラビロカマキリ, 神奈川県立博物館研究報告(自然科学): 97-99. 神奈川県立博物館.

【関連文献】

- 日浦勇, 1977. カマキリ目. 伊藤修四郎他編 原色日本昆虫図鑑: 46-48. 保育社.
- 岡田正哉, 2001. 昆虫ハンター カマキリのすべて: 63. トンボ出版.

(戸田尚希)

【新規作成】

節足動物・昆虫類 <コウチュウ目 カミキリムシ科>
ARTHROPODA INSECTA <COLEOPTERA CERAMBYCIDAE>

特定, 総合対策

クビアカツヤカミキリ *Aromia bungii* (Faldermann, 1835)

【概要と選定理由】

本種は世界的にサクラやウメ、モモ等の害虫として知られている。国内では愛知県で初めて確認されたと言われていたものの、埼玉県で初めて確認されており、以降各地で見つかり問題となっている。

加害されたサクラは、フラスを出しほぼ枯れてしまうので、侵入された各地の桜並木では被害が深刻である。

【形態】

体長22~38mm。体全体は光沢のある黒色。前胸背板は赤色で左右に浅い窪みを持ち、両側面に頑丈なとげ状の瘤をもつ。触角は黒色でオスは体長の1.7倍ほど、メスは体長より少し長い程度。脚は青みを帯びた黒色。



(雄) (雌)
クビアカツヤカミキリ (戸田撮影)

【分布の概要】

【世界の分布】

中国、モンゴル、朝鮮半島、台湾、ベトナム。

【国内の分布】

埼玉県(2011年)、愛知県(2012年)、群馬県、東京都、大阪府、徳島県(2015年)、栃木県(2016年)。

【県内の分布】

海部地域。

【生息地の環境/生態的特性】

スモモ、サクラ、ウメ、カキ、モモ、ポプラなどの樹木に寄生する。一度の産卵は多く、被害は衰弱し枯死する。特にスモモやモモを好むが、桜並木では古木ほどやられやすい。

幼虫は樹木の内部で1~3年過ごし、羽脱する。成虫は6月ごろに出現し、交尾や産卵を行なう。海外の報告では上記の他に、ザクロ、オリーブ、ヤナギ、コナラなど多くの樹種を加害するとされる。

【侵入の経緯/現在の生息状況】

2012年に県内海部地域で初めて確認された。それ以降、愛知県では分布の拡大は阻止されている。分布拡大と駆除は均衡している。

【被害状況/駆除策と留意点】

加害されたサクラやスモモを伐採する以外、拡散の防除は難しく、私有地などでは完全に駆逐できる状況にない。

【引用文献】

愛知県, 2013. 平成25年度病害虫発生予察特殊報第2号, 愛知県農業総合試験場 環境基盤研究部 病害虫防除室.

【関連文献】

- 安達辰男, 2017. 埼玉県深谷市におけるクビアカツヤカミキリ *Aromia bungii* の2011年以降の記録, 寄せ蛾記 167号: 29-30. 埼玉昆虫談話会.
- 安岡拓郎, 2017. クビアカツヤカミキリ *Aromia bungii* (Faldermann) 幼虫に対する薬剤の防除効果, 植物防疫所調査研究報告第53号: 51-62. 横浜植物防疫所調査研究部.

(戸田尚希)

【新規作成】

節足動物・昆虫類 <コウチュウ目 ハムシ科>
ARTHROPODA INSECTA <COLEOPTERA CHRYSOMELIDAE>

総合対策

フェモラータオオモモフトハムシ *Sagra femorata* (Drury, 1773)

【概要と選定理由】

当初は2009年、三重県松阪市において、飼育目的で輸入されたものが逃がされ、広がったものである。三重県では少しずつ分布が拡大している。愛知県では2017年に名古屋市から見つかった。クズを加害し、冬期に根元辺りにゴールを作る。一度侵入されると駆除はとても難しい。

【形態】

体長は15~20mmほど。体は赤色の金属光沢がある。構造色を持ち、角度によって背面は青色や緑色に見える。後腿節は太く、オスはメスに比べ後脚が太く長くなることから区別できる。成虫は6月ごろから発生しはじめ、8月ごろまで姿を見ることができ



(雄) (雌)

フェモラータオオモモフトハムシ (戸田撮影)

【分布の概要】

【世界の分布】

カンボジア、中国、インド、マレーシア、ラオス、ミャンマー、スリランカ、タイ、ベトナムなど東洋熱帯地域。

【国内の分布】

愛知県、三重県。

【県内の分布】

名古屋市。

【生息地の環境／生態的特性】

主な生息環境は、河川敷のクズ。加害されたクズの茎部にはゴールと呼ばれる蔓がコブ状にふくらんだ部分が見られる。このゴールの中には、本種の幼虫が縦に長いカプセル状の蛹室を作り、その中には1~十数個の個体が入っていることもある。東南アジア地域では、マメ科植物を中心にヒルガオ科、ヤマモ科、柑橘類やコーヒーなどの被害も報告されている。

【侵入の経緯／現在の生息状況】

日本では、2009年8月、三重県松阪市においてはじめて採集された。しかし、同年中に数キロメートル以上はなれた複数箇所成虫が確認され、クズ(マメ科)を宿主としてすでに数年前から発生をつづけていたものと推定される。おそらくペットとして違法に輸入され、松阪市内のペット商店で販売されていた個体の逸出あるいは故意の放虫に由来するものであろう(秋田ほか, 2009)。

【被害状況／駆除策と留意点】

主要な宿主であるクズは、広く普通に分布することから、少なくとも本州中部以南なら日本中どこでも定着が可能であると思われる。また海外では他のマメ科植物も利用しているため、農業害虫としても今後の分布拡大が懸念される。しかしながら現在、根絶は非常に困難である。

【引用文献】

秋田勝己・乙部宏・高桑正敏, 2009. 日本鞘翅学会第22回大会・日本昆虫学会関東支部第46回大会合同大会講演要旨集, p.16.

【関連文献】

秋田ほか, 2010. 月刊むし, (473): pp.43-44.

(戸田尚希)

【新規作成】

軟体動物・貝類 <汎有肺目 オカチョウジガイ科>
MOLLUSCA <PANPULMONATA SUBULINIDAE>

総合対策

オオクビキレガイ *Rumina decollata* (Linnaeus, 1758)

【概要と選定理由】

本種は、地中海沿岸地域を原産国として世界中の地中海性気候や温暖気候の地域へ移入した陸産貝類である。日本では1988年に初めて福岡県北九州市戸畑区で生息が確認され(湊・魚住, 1991)、西日本では福岡県を中心に九州北・中部(例えば松隈・武田, 2009)、山口県(増野, 1992; 保坂, 1996)に分布し、その後、近畿地方(和歌山県)(湊他, 2002)や関東地方(千葉県)(松隈・武田, 2009)でも定着が確認されており、生息地を拡大している。愛知県では、2013年に知多郡で1個体生貝が採集されたのが初めての記録(守谷, 2014)で、2015年に岡崎市中島町で本種の定着が確認された(川瀬・今泉, 2016)。北九州市や宗像市などでは2005年頃から生息密度が急速に高まり、花壇の花や農作物への被害が問題となり、和歌山県田辺市では、野菜苗の被害のほか、収穫用ネットに落ちた特産の梅の実の被害が発生している(松隈・武田, 2009)。また本種は肉食性の傾向も有り、在来カタツムリ等の陸産貝類、ナメクジ類、ミミズ類への影響も危惧される。

【形態】

殻高は22~35mm。殻は細長く円筒状(図1-4)。殻表には成長脈をめぐらすほとんど平滑、殻の色彩は灰白褐色。縫合は浅い。殻口は卵型で外唇は単純でほとんど肥厚しない。軸唇はまっすぐ、上部で少し半曲。胎殻は丸く比較的大きい(図4b)が、殻頂部分は成長に伴い欠落する。和名はこの特徴に由来する。日本では大型のキセルガイ科貝類(日本産は全て左巻き)と誤同定されることもあるが、本種は右巻き。軟体部は濃褐色、外套膜に濃褐色雲状の斑紋が有り、殻の模様に見えるが殻には斑紋はない(図4c)。

【分布の概要】

【世界の分布】

地中海沿岸原産の種であるが、現在ではオーストラリア大陸を除く世界中の温暖な地域に広く分布が拡大している。

【国内の分布】

1988年に日本で移入が確認され、現在では福岡県を中心に佐賀県、大分県、熊本県、山口県、和歌山県、千葉県でも定着が確認されている。

【県内の分布】

愛知県からの本種の産出は前述した2例で、定着が確認されているのは岡崎市中島町の比較的狭い範囲だけである。しかし、本年(2017年7月)の調査では、明らかな生息範囲の拡大が認められたので注意が必要であり、現在比較的狭い範囲で生息している本種の根絶が強く望まれる。

【生息地の環境／生態的特性】

比較的乾いた空き地、荒地、灌木地、小石まじりの草地など(松隈他, 2005)、岡崎市での観察では果樹の根元、農業用マルチの下、投棄された瓦の間で休眠する個体が多かった。

温度選好性として冬季は土にもぐることによって暖温帯~温帯で越冬できる。単為生殖および両性生殖を行い、産卵数:年間約200個産卵、3~5日間で32個~55個産卵の記録あり、約10日~30日前後で孵化。直径約2mm。乾燥耐性がある(松隈他, 2005)。冬は土に潜って越冬。木にあまり登らない。夜行性。食性は雑食性で、他のカタツムリ類も捕食、農作物等植物体(松隈他, 2005)。10ヶ月で成体になり、2月~6月、9月~11月に産卵(松隈他, 2005)。岡崎市の観察では、夏期の昼間にはほとんど地表に姿を現さず、物陰に隠れて休眠する個体がほとんどであった。

【侵入の経緯／現在の生息状況】

日本への侵入についての詳細な経路は解明されていないが、客土、園芸用資材などに伴って移入されたことが考察されている。日本国内の分布拡大については、作物の苗、肥料、堆肥に伴って非意図的に移入されたと考えられている。岡崎市の場合も作物苗による侵入が有力である(川瀬・今泉, 2015; 2017年現地調査聞き取り資料)。

【被害状況／駆除策と留意点】

前述の通り、九州地方、和歌山県では農業被害が出ている。本種は、結球性レタスへの嗜好性が強いことからレタス産地へ入った場合の農業被害の発生が懸念される(松隈・武田, 2009)。ナメクジ用の粒剤を初期に適宜使用するのが駆除策として考えられるが、実際に一定地域の本種の個体群を根絶した例は報告されていない。

【引用文献】

江川和文・玉田一晃, 2004. 和歌山県におけるオオクビキレガイの生息記録. 南紀生物, 46(2): 106-108.
保坂健市, 1996. 山口県宇部市で1996年に採集された移入非海産腹足類3種. ユリヤガイ, 4(1-2): 191-194.
増野和幸, 1992. オオクビキレガイ山口県に産す. ちりぼたん, 23(2): 55-56.
川瀬基弘・今泉久祥, 2015. 愛知県岡崎市に定着したオオクビキレガイ. かきつばた, 41: 55-56.
松隈明彦, 2008. オオクビキレガイ関東に侵入. 九州大学総合研究博物館ニュース, (11): 5.
松隈明彦・秋月定良・秋月シズカ・嶺井久勝, 2005. 偶発的移入種オオクビキレガイ(腹足綱: オカクビキレガイ科)の福岡県での生息状況と拡散速度. ちりぼたん, 37(1): 7-12.
松隈明彦・武田悟史, 2007. オオクビキレガイの日本への侵入と拡散. Venus, 66(1-2): 124.
松隈明彦・武田悟史, 2009. 外来種オオクビキレガイ(軟体動物門腹足綱)の日本での分布状況と移動方法. 九州大学総合研究博物館研究報告, 7: 35-84.
湊 宏・久保田信・土生紳吾, 2002. 白浜町沿岸に漂着したオオクビキレガイ. 南紀生物, vol. 44(1): 64-65.
湊 宏・魚住賢司, 1991. 北九州で見つかったオオクビキレガイ. ちりぼたん, 22(3): 72-74.
守谷茂樹, 2014. 愛知県で確認されたオオクビキレガイ. かきつばた, 39: 52.

【関連文献】

松隈明彦, 2005. オオクビキレガイ福岡市に出現. 九州大学総合研究博物館ニュース, (5): 2.
松隈明彦, 2007. オオクビキレガイの拡散. 九州大学総合研究博物館ニュース, (9): 5-6.
佐野彰一・武田悟史・松隈明彦・三島美佐子, 2014. 外来性陸貝オオクビキレガイの原産地国の推定, 生殖戦略と生態系への影響. Venus, 72(1-4), 165-166.
植物防疫所, 2011. 植物防疫法施行規則別表一の第一の二の項及び第二の二の項の規定に基づき、農林水産大臣が指定する有害動物及び有害植物を指定する件 (Accessed on 2017-12-12)
http://www.pps.go.jp/law_active/Notification/basis/5/245/html/245.html
魚住賢司, 1996. オオクビキレガイの新分布地. 九州の貝, (47): 30.
魚住賢司, 1998. 福岡町の貝類. 福岡町史自然編II、福岡町, 180pp.

(木村昭一)

表－1 外来種リスト【陸域及び淡水域：植物】（その3）

No.	大分類群	科名	和名	移入の区分		他指定区分				備考		
				国外	国内	県条例公表種	特定外来生物	外来種リスト	日本ワースト100		世界ワースト100	
421	双子葉	マメ	タチオランダゲンゲ	○								
422	双子葉	マメ	ベニバナツメクサ	○								
423	双子葉	マメ	オオバナアカツメクサ	○								
424	双子葉	マメ	ムラサキツメクサ	○								
425	双子葉	マメ	セツカツメクサ	○								
426	双子葉	マメ	シロツメクサ	○								
427	双子葉	マメ	モモイロツメクサ	○								
428	双子葉	マメ	ヒナツメクサ	○								
429	双子葉	マメ	オオヤハズエンドウ	○								
430	双子葉	マメ	ホソバヤハズエンドウ	○								
431	双子葉	マメ	ピロドクサフジ	○				産業				
432	双子葉	マメ	ナヨクサフジ	○				産業				
433	双子葉	マメ	ナガバハマササゲ	○								
434	双子葉	マメ	ササゲ	○								
435	双子葉	マメ	ヤマフジ		○							
436	双子葉	マメ	シラフジ		○							
437	双子葉	バラ	セイヨウハゴロモグサ	○								
438	双子葉	バラ	ボケ	○								
439	双子葉	バラ	ビワ		○			産業				
440	双子葉	バラ	シロバナヤマブキ		○							
441	双子葉	バラ	ヤエヤマブキ		○							
442	双子葉	バラ	ハイキジムシロ	○								
443	双子葉	バラ	コバナキジムシロ	○								
444	双子葉	バラ	オオヘビイチゴ	○								
445	双子葉	バラ	オキシムシロ	○								
446	双子葉	バラ	メザクラ		○							
447	双子葉	バラ	ニワウメ	○								
448	双子葉	バラ	ウメ	○								
449	双子葉	バラ	モモ		○?							
450	双子葉	バラ	スモモ	○								
451	双子葉	バラ	イトザクラ		○							
452	双子葉	バラ	オオシマザクラ		○							
453	双子葉	バラ	コヒガンザクラ		○							
454	双子葉	バラ	ソメイヨシノ		○							
455	双子葉	バラ	タチバナモドキ	○				総合				
456	双子葉	バラ	トキワサンザシ	○				総合				
457	双子葉	バラ	カザンデマリ	○				総合				
458	双子葉	バラ	ナン	○								
459	双子葉	バラ	アイナシ									
460	双子葉	バラ	シャリンバイ		○							在来個体群もある
461	双子葉	バラ	ナニワイバラ	○								
462	双子葉	バラ	アズマイバラ		○							逸出個体群もある
463	双子葉	バラ	ハマナス		○							
464	双子葉	バラ	セイヨウヤブイチゴ	○								
465	双子葉	バラ	カジチゴ		○							在来個体群らしいものもある
466	双子葉	バラ	ナガボノアカワレモコウ		○							
467	双子葉	バラ	ニワナナカマド	○								
468	双子葉	バラ	コデマリ	○								
469	双子葉	バラ	ユキヤナギ	○?								
470	双子葉	グミ	ナワシログミ		○							在来個体群もある
471	双子葉	クロウメモドキ	ナツメ	○								
472	双子葉	ニレ	ハルニレ		○							
473	双子葉	ニレ	ケヤキ		○							在来個体群もある
474	双子葉	アサ	アサ	○								
475	双子葉	クワ	ツルクワソ		○							
476	双子葉	クワ	カジノキ		○?						RDB p.164参照	
477	双子葉	クワ	コウソ		○							
478	双子葉	クワ	オオイトバ(移入型)		○							
479	双子葉	クワ	アコウ		○							
480	双子葉	クワ	ハリグワ		○							
481	双子葉	クワ	マグワ		○							
482	双子葉	クワ	ケグワ		○							
483	双子葉	イラクサ	ラセイタソウ		○							
484	双子葉	イラクサ	ナンバンカラムシ		○							
485	双子葉	イラクサ	ハドノキ		○							
486	双子葉	イラクサ	カベイラクサ		○							
487	双子葉	イラクサ	コゴメミズ		○			重点				
488	双子葉	イラクサ	コケミズ		○							在来個体群もある
489	双子葉	ブナ	スクダジイ		○							在来個体群もある
490	双子葉	ブナ	ツブラジイ×スクダジイ									

※表中の灰色枠は本調査において生息生育情報等を収集・整理し、1種1頁の解説文を作成または加筆修正した種を示す。

注1: 科の配列は原則としてAPG分類系 (APG III) に従った。科内の種の配列は学名のアルファベット順とした。また、動物で表記されている目名と属名は省略し、それに代えてAPG分類系による大分類群を併記した。
注2: APG分類系大分類群 小葉: 小葉植物、シダ: 大葉シダ植物、裸子: 裸子植物、原始被子: 原始被子植物、単子葉: 単子葉類、双子葉: 真正双子葉類。
注3: 「外来種リスト」は「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト」を示す(予防: 定着予防外来種、緊急: 緊急対策外来種、重点: 重点対策外来種、総合: その他の総合対策外来種、産業: 産業管理外来種)。
注4: 移入の区分(移入元) 国外、国外のどちらにも○が付されていないものは、移入種間、または移入種と在来種の間に形成された自然雑種である。あるいは移入個体群が国内由来か国外由来か不明なものである。

表-1 外来種リスト【陸域及び淡水域：植物】(その4)

No.	大分類群	科名	和名	移入の区分		他指定区分				備考
				国外	国内	県条例公表種	特定外来生物	外来種リスト	日本ワースト100	
631	双子葉	アオイ	キンゴジカ	○						
632	双子葉	アオイ	アメリカキンゴジカ	○						
633	双子葉	アオイ	アマミキンゴジカ	○						
634	双子葉	アオイ	ボダイジュ	○						
635	双子葉	ジンチョウゲ	ジンチョウゲ	○						
636	双子葉	ジンチョウゲ	キガンビ		○					在来個体群もある
637	双子葉	ジンチョウゲ	ミツマタ	○						
638	双子葉	フウチョウソウ	ヒメフウチョウソウ	○						
639	双子葉	フウチョウソウ	アフリカフウチョウソウ	○						
640	双子葉	フウチョウソウ	セイヨウフウチョウソウ	○						
641	双子葉	アブラナ	アレチナズナ	○						
642	双子葉	アブラナ	シロイヌナズナ	○						
643	双子葉	アブラナ	ハルザキヤマガラン	○				総合	○	
644	双子葉	アブラナ	シロガラシ	○						
645	双子葉	アブラナ	セイヨウカラシナ	○				総合		
646	双子葉	アブラナ	セイヨウアブラナ	○						
647	双子葉	アブラナ	クログラシ	○						
648	双子葉	アブラナ	ハリゲナタネ	○						
649	双子葉	アブラナ	ルベラナズナ	○						
650	双子葉	アブラナ	コタネツケバナ	○						
651	双子葉	アブラナ	ミチタネツケバナ	○						
652	双子葉	アブラナ	ニワサキタネツケバナ	○						
653	双子葉	アブラナ	ウジラグサ	○						
654	双子葉	アブラナ	キバナズシロ	○						
655	双子葉	アブラナ	オハツキガラシ	○						
656	双子葉	アブラナ	エソズシロ	○						
657	双子葉	アブラナ	ヒメムラサキハナ	○						
658	双子葉	アブラナ	ダイコクマメゲンバイナズナ	○						
659	双子葉	アブラナ	キレハマメゲンバイナズナ	○						
660	双子葉	アブラナ	カラクサナズナ	○						
661	双子葉	アブラナ	アコウゲンハイ	○						
662	双子葉	アブラナ	マメゲンバイナズナ	○						
663	双子葉	アブラナ	ニワナズナ	○						
664	双子葉	アブラナ	ゴウダソウ	○						
665	双子葉	アブラナ	コバノオランダガラシ	○						
666	双子葉	アブラナ	オランダガラシ	○				重点		
667	双子葉	アブラナ	ムラサキオランダガラシ	○						
668	双子葉	アブラナ	ショカツサイ	○						
669	双子葉	アブラナ	セイヨウダイコン	○						
670	双子葉	アブラナ	ダイコン	○						
671	双子葉	アブラナ	ミヤガラシ	○						
672	双子葉	アブラナ	キレハイヌガラシ	○						
673	双子葉	アブラナ	ノハラガラシ	○						
674	双子葉	アブラナ	ケノハラガラシ	○						
675	双子葉	アブラナ	ハタザオガラシ	○						
676	双子葉	アブラナ	ホソエガラシ	○						
677	双子葉	アブラナ	ケカキネガラシ	○						
678	双子葉	アブラナ	ハマカキネガラシ	○						
679	双子葉	アブラナ	イヌカキネガラシ	○						
680	双子葉	アブラナ	ゲンバイナズナ	○						
681	双子葉	タデ	シヤクチリソバ	○				総合		
682	双子葉	タデ	ソバ	○						
683	双子葉	タデ	ソバカズラ	○						
684	双子葉	タデ	ツルドクダミ	○				総合		
685	双子葉	タデ	オオイタドリ		○					
686	双子葉	タデ	ワイヤーブランツ	○						
687	双子葉	タデ	ヒメツルソバ	○				総合		
688	双子葉	タデ	オオケタデ	○						
689	双子葉	タデ	タデアイ	○						
690	双子葉	タデ	ハイミチヤナギ	○						
691	双子葉	タデ	ヤンバルミチヤナギ		○					
692	双子葉	タデ	ホザキニワヤナギ	○						
693	双子葉	タデ	ヒメスイバ	○				総合		
694	双子葉	タデ	カギミギシギシ	○						
695	双子葉	タデ	アレチギシギシ	○						
696	双子葉	タデ	ナガバギシギシ	○				総合		
697	双子葉	タデ	コギシギシ		○					在来個体群もある
698	双子葉	タデ	エゾノギシギシ	○				総合		
699	双子葉	タデ	アレチエゾノギシギシ	○						
700	双子葉	タデ	トガマダイオウ							

※表中の灰色枠は本調査において生息生育情報等を収集・整理し、1種1頁の解説文を作成または加筆修正した種を示す。

注1: 科の配列は原則としてAPG分類系 (APG III) に従った。科内の種の配列は学名のアルファベット順とした。また、動物で表記されている目名と属名は省略し、それに代えてAPG分類系による大分類群を併記した。

注2: APG分類系大分類群 小葉: 小葉植物、シダ: 大葉シダ植物、裸子: 裸子植物、原始被子: 原始被子植物、単子葉: 単子葉類、双子葉: 真正双子葉類。

注3: 「外来種リスト」は「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト」を示す(予防: 定着予防外来種、緊急: 緊急対策外来種、重点: 重点対策外来種、総合: その他の総合対策外来種、産業: 産業管理外来種)。

注4: 移入の区分(移入元) 国外、国外のどちらにも○が付されていないものは、移入種間、または移入種と在来種の間に形成された自然雑種である。あるいは移入個体群が国内由来か国外由来か不明なものである。

(2) 外来種リスト(陸域)【動物】

表-2 外来種リスト【陸域:動物】(その1)

No.	分類群	目名	科名	属名	和名	移入の区分		他指定区分				備考	確認区画																					
						国外	国内	県条例公表種	特定外来生物	外来種リスト	日本フースト100		世界フースト100	確認区画																				
														確認区画																				
1	哺乳類	齧歯目	ネズミ	ハツカネズミ	ハツカネズミ(外来個体群)	○				重点		○	在来個体群は広く生息する(注3)																					
2	哺乳類	齧歯目	ネズミ	クマネズミ	クマネズミ	○				緊急		○	都市部以外は在来個体群?(注4)																					
3	哺乳類	齧歯目	ネズミ	クマネズミ	ドブネズミ	○				重点			都市部以外は在来個体群?(注4)																					
4	哺乳類	齧歯目	ヌートリア	ヌートリア	ヌートリア	○			○	緊急	○	○																						
5	哺乳類	ウサギ	アナウサギ	アナウサギ	アナウサギ	○				重点	○	○																						
6	哺乳類	鯨偶蹄目	イノシシ	イノシシ	交雑イノシシ(イノブタ)	○				重点	○	○	自然雑種																					
7	哺乳類	食肉目	イタチ	イタチ	フェレット	○				予防																								
8	哺乳類	食肉目	イタチ	イタチ	シベリアイタチ	○					○																							
9	哺乳類	食肉目	アライグマ	キンカジュウ	キンカジュウ	○																												
10	哺乳類	食肉目	アライグマ	アライグマ	アライグマ	○			○	緊急	○																							
11	哺乳類	食肉目	イヌ	イヌ	ノイヌ	○				重点																								
12	哺乳類	食肉目	ネコ	ネコ	ノネコ	○				緊急	○	○																						
13	哺乳類	食肉目	ジャコウネコ	ハクビシン	ハクビシン	○	○			重点																								
14	哺乳類	食肉目	スカンク	スカンク	スカンク科の1種	○																												
15	哺乳類	食肉目	スカンク	スカンク	セジロスカンク	○																												
16	鳥類	フラミンゴ	フラミンゴ	フラミンゴ	チリーフラミンゴ	○																												
17	鳥類	フラミンゴ	フラミンゴ	フラミンゴ	フラミンゴ属の1種	○																												
18	鳥類	キジ	キジ	コジュケイ	コジュケイ	○																												
19	鳥類	キジ	キジ	Colinus	コリンウズラ	○				総合																								
20	鳥類	カモ	カモ	マガモ	アヒル(マガモ)	○																												
21	鳥類	カモ	カモ	Gainina	バリケン(ノバリケン)	○																												
22	鳥類	カモ	カモ	ハクチョウ	コブハクチョウ	○	○			総合																								
23	鳥類	ハト	ハト	カワラバト	ドバト(カワラバト)	○					○																							
24	鳥類	ハト	ハト	チョウショウバト	ウスユキバト	○																												
25	鳥類	コウノトリ	コウノトリ	コウノトリ	コウノトリ(国内放鳥個体)		○																											
26	鳥類	ツル	ツル	カンムルツル	ホオジロカンムリツル	○																												
27	鳥類	チドリ	セイタカシギ	セイタカシギ	クロエリセイタカシギ	○				総合																								
28	鳥類	インコ	オウム	オカメインコ	オカメインコ	○																												
29	鳥類	インコ	インコ	セキセイインコ	セキセイインコ	○																												
30	鳥類	インコ	インコ	ダルマインコ	ワカケホンセイインコ	○				総合																								
31	鳥類	タカ	コンドル	ヒメコンドル	ヒメコンドル	○																												
32	鳥類	スズメ	チメドリ	ガビチョウ	ガビチョウ	○			○	重点	○																							
33	鳥類	スズメ	チメドリ	ソウシチョウ	ソウシチョウ	○			○	重点	○																							
34	鳥類	スズメ	ムクドリ	Lamprotomis	ツキノワテリムクドリ	○																												
35	鳥類	スズメ	ハタオリドリ	キンランチョウ	キンランチョウ	○																												
36	鳥類	スズメ	アトリ	ヒワ	ゴシキヒワ	○																												
37	鳥類	スズメ	カエデチョウ	ベニスズメ	ベニスズメ	○																												
38	鳥類	スズメ	カエデチョウ	キンバラ	キンバラ	○																												
39	鳥類	スズメ	カエデチョウ	キンバラ	ギンバラ	○																												
40	鳥類	スズメ	カエデチョウ	キンバラ	ブンチョウ	○																												
41	昆虫類	カマキリ	カマキリ	Hierodula	ムネアカハラビロカマキリ	○																												
42	昆虫類	バッタ	コオロギ	Gryllodes	カマドコオロギ	○																												
43	昆虫類	バッタ	マツムシ	Trujalia	アオマツムシ	○																												
44	昆虫類	バッタ	ヒバリモドキ	Metiochodes	ウスグモスズ	○																												
45	昆虫類	シロアリ	ミゾガシラシロアリ	Goptotermes	イエシロアリ	○																												
46	昆虫類	ゴキブリ	ゴキブリ	Periplaneta	ワモンゴキブリ	○																												
47	昆虫類	ゴキブリ	ゴキブリ	Periplaneta	コワモンゴキブリ	○																												
48	昆虫類	ゴキブリ	ゴキブリ	Periplaneta	トビイロゴキブリ	○																												
49	昆虫類	ゴキブリ	ゴキブリ	Periplaneta	クロゴキブリ	○																												
50	昆虫類	ゴキブリ	チャバネゴキブリ	Blattella	チャバネゴキブリ	○																												

注1: 表中の赤字は本調査での追加情報を示す。●は該当する区画内で確認記録があったことを示す(絶滅を含む)。◎は該当する広域区画内で確認記録があったことを示す(絶滅を含む)。
 注2: 「外来種リスト」は「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト」を示す(予防:定着予防外来種、緊急:緊急対策外来種、重点:重点対策外来種、総合:その他の総合対策外来種、産業:産業管理外来種)。
 注3: *はハツカネズミ外来個体群の確認記録があったとされる「名古屋港のコンテナ置き場」を示す(名古屋港区の「船見埠頭」、飛鳥市の「飛鳥埠頭」、弥富市の「鍋田埠頭」があるが、どのコンテナ置き場で捕獲された個体であるのか判然としないため、該当する全ての区画に*を付した)。
 注4: 確認区画はドブネズミ、クマネズミを区別せず表記した。
 注5: 移入の区分(移入元) 国外、国外のどちらにも○が付されていないものは、移入種間、または移入種と在来種の間形成された自然雑種である。

※表中の灰色枠は本調査において生息生育情報等を収集・整理し、1種1頁の解説文を作成または加筆修正した種を示す。

表一 2 外来種リスト【陸域：動物】（その7）

No.	分類群	目名	科名	属名	和名	移入の区分		他指定区分				備考
						国外	国内	県条例公表種	特定外来生物	外来種リスト	日本ワースト100	
151	昆虫類	ハエ	カ	Culex	チカイエカ	○						
152	昆虫類	ハエ	ミズアブ	Hermetia	アメリカミズアブ	○						
153	昆虫類	ハエ	ハモグリバエ	Agromyzidae	トマトハモグリバエ	○						県内全域で発生していると考えられるが、詳細不明
154	昆虫類	ハエ	ショウジョウバエ	Drosophila	キロスジョウバエ	○						
155	昆虫類	ハエ	ヒメイエバエ	Fannia	ヒメイエバエ	○						
156	昆虫類	ハエ	クロバエ	Phormia	クロキンバエ	○						
157	昆虫類	チョウ	アゲハチョウ	Sericius	ホソオチョウ	○		○		重点		
158	昆虫類	チョウ	シロチョウ	Pieris	モンシロチョウ	○						
159	昆虫類	チョウ	タテハチョウ	Hestina	アカボシゴマダラ	○		○		重点		
160	昆虫類	チョウ	シジミチョウ	Chilades	クロマダラソテシジミ	○						自然分布の可能性もある
161	昆虫類	チョウ	ハマキガ	Grapholita	ナシヒメシンクイ	○						
162	昆虫類	チョウ	ミノガ	Eumeta	オオミノガ	○						
163	昆虫類	チョウ	ヒロズコガ	Tinea	イガ	○						
164	昆虫類	チョウ	ヒロズコガ	Tineola	コイガ	○						
165	昆虫類	チョウ	ヒロズコガ	Opogona	クロテンオオメンコガ	○						
166	昆虫類	チョウ	マルハキバガ	Anchonoma	コクマルハキバガ	○						
167	昆虫類	チョウ	キバガ	Phthorimaea	ジャガイモキバガ	○						
168	昆虫類	チョウ	キバガ	Sitotroga	バクガ	○						
169	昆虫類	チョウ	マダラガ	Artona	タケノホソクロバ	○						
170	昆虫類	チョウ	イラガ	Parasa	ヒロヘリアオイラガ	○						
171	昆虫類	チョウ	メイガ	Scirpophaga	イッテンオオメイガ	○						
172	昆虫類	チョウ	メイガ	Parapediasia	シバツトガ	○						
173	昆虫類	チョウ	メイガ	Paralipsa	ツツリガ	○						
174	昆虫類	チョウ	メイガ	Aglossa	コメノシマメイガ	○						
175	昆虫類	チョウ	メイガ	Pyralis	カシノシマメイガ	○						
176	昆虫類	チョウ	メイガ	Plodia	ノシメダラメイガ	○						
177	昆虫類	チョウ	スズメガ	Daphnis	キョウチクトウスズメ	○						
178	昆虫類	チョウ	ヒトリガ	Hyphantria	アメリカシロヒトリ	○						
179	昆虫類	チョウ	ヤガ	Helicoverpa	オオタバコガ	○						在来種の可能性もある
180	昆虫類	ハチ	ツヤコバチ	Aphelinus	ワタムシヤドリコバチ	○						
181	昆虫類	ハチ	タマバチ	Dryocosmus	クリタマバチ	○						
182	昆虫類	ハチ	セイボウ	Praestochrysis	イラガセイボウ	○						
183	昆虫類	ハチ	アリ	Linepithema	アルゼンチンアリ	○						○
184	昆虫類	ハチ	アリ	Monomorium	イエヒメアリ	○						○
185	昆虫類	ハチ	アリ	Solenopsis	アカカミアリ	○						○ 緊急
186	昆虫類	ハチ	アリ	Solenopsis	ヒアリ	○						○ 予防
187	昆虫類	ハチ	セナガアナバチ	Ampulex	サトセナガアナバチ	○						
188	昆虫類	ハチ	アナバチ	Sceliphron	アメリカジガバチ	○						
189	昆虫類	ハチ	ミツバチ	Xylocopa	タイワンタケクマバチ	○						
190	昆虫類	ハチ	ミツバチ	Apis	セイヨウミツバチ	○						
191	貝類(陸産)	盤足	アズキガイ	アズキガイ	アズキガイ	○						
192	貝類(陸産)	盤足	カワザンショウガイ	ヘソカドガイ	ウスイロオカチグサ	○						
193	貝類(陸産)	柄眼	スナガイ	スナガイ	メリケンスナガイ	○						
194	貝類(陸産)	柄眼	オカチョウジガイ	トクサオカチョウジガイ	トクサオカチョウジガイ	○						
195	貝類(陸産)	柄眼	オカチョウジガイ	オオクビキレガイ	オオクビキレガイ	○						総合
196	貝類(陸産)	柄眼	オカモノアラガイ	オカモノアラガイ	オカモノアラガイ属の1種	○						
197	貝類(陸産)	柄眼	コハクガイ	コハクガイ	コハクガイ	○						
198	貝類(陸産)	柄眼	コハクガイ	ヒメコハクガイ	ヒメコハクガイ	○						
199	貝類(陸産)	柄眼	コウラナメクジ	チャコウラナメクジ	チャコウラナメクジ	○						
200	貝類(陸産)	柄眼	コウラナメクジ	ノハラナメクジ	イハラナメクジ	○						
201	貝類(陸産)	柄眼	オナジマイマイ	オナジマイマイ	オナジマイマイ	○						
合計(種数等)		27目	109科	170属	201種	195	6	10	9	32	21	9

注1: 表中の赤字は本調査での追加情報を示す。●は該当する区画内で確認記録があったことを示す(絶滅を含む)。◎は該当する広域区画内で確認記録があったことを示す(絶滅を含む)。
 注2: 「外来種リスト」は「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト」を示す(予防: 定着予防外来種、緊急: 緊急対策外来種、重点: 重点対策外来種、総合: その他の総合対策外来種、産業: 産業管理外来種)。
 注3: *はハツカネズミ外来個体群の確認記録があったとされる「名古屋港のコンテナ置き場」を示す(名古屋港区の「船見埠頭」、飛鳥市の「飛鳥埠頭」、弥富市の「鍋田埠頭」があるが、どのコンテナ置き場で捕獲された個体であるのか判断としないため、該当する全ての区画に*を付した)。
 注4: 確認区画はドブネズミ、クマネズミを区別せず表記した。
 注5: 移入の区分(移入元) 国外、国外のどちらにも◎が付されていないものは、移入種間、または移入種と在来種の間に形成された自然雑種である。

※表中の灰色枠は本調査において生息生育情報等を収集・整理し、1種1頁の解説文を作成または加筆修正した種を示す。

